

うかがわれる折から、今回のケネディの思い切った政治的な動きに対して、これが財界全般の反感をいっそうあおることになりはしないかと懸念する向きもみられる。いずれにせよ自由経済体制と経済の実際上の要請とをどのようにして調和させていくかは今後米国の政治、経済に課せられたきわめて重要な問題であり、その推移が注目される。

## 東南アジアの

### 第1次商品市況の現状

東南アジアの主要第1次商品市況は、ここ1年余にわたり低迷を続けている。米国の景気回復にもかかわらず、市況の積極的な好転がみられないのみか、むしろ輸出価格の低落が外貨事情悪化の要因ともなっている。こうした市況低迷の情勢から、最近再び第1次商品価格安定の問題がクローズ・アップされてきた。

#### 主要第1次商品価格の低迷とその背景

過去1年余にわたる東南アジアの第1次商品市況のすう勢は、1961年の年初から5月にかけて、工業原料、ジュートなどを中心にやや反落をみせたものの、1961年年央後は漸落に転じその後、小波動はあったが総じて低迷を続けたまま最近に至っている。しかも現在(3月末)、多くの商品は市況が全般に不冴であった1960年末の価格さえ下回っている。これを主要商品別にみると、ゴム、茶、ジュートがとくに著しい低位にあり、一昨末の価格を7～31%方下回り、過去2年間の最高水準に比べて30～42%方の低価格にある。また綿花(パキスタン)、砂糖、コブラの市況も依然低迷を続けており、過去2年間の最高水準を15～42%方下回っている。すなわち、東南アジア主要第1次商品8品目(ゴム、茶、ジュート、米、コブラ、砂糖、錫、綿花——輸出額順)のうち、米と錫を除く6品目が、現在きわめて低位の価格に落ち込

んでいることになる。

このような市況低迷の背景には、商品により区々な要因もあるが、ゴム、茶、ジュート、砂糖、綿花などは総じて供給量の増大に主因があるとみられる。ゴムは米国備蓄在庫の放出(現在毎月5千トンさらに先行き大量放出の懸念もある)から価格上昇力が押えられており、また、茶、ジュート、綿花は豊作による供給要因が主要な軟化材料になっている。また砂糖もキューバ糖の対米特惠輸出が停止され自由市場にはけ口を求めたのが市況低落の主因となっている。しかも、このような供給要因に加えて、①とくに米国における合成ゴムの大量進出、②先進工業国一般におけるコブラの代替品としての合成洗剤、および大豆油(マーガリン用)の利用、③あるいは穀物輸送方式の変化(ばら積み輸送の普及)に伴うジュート袋の用途の減少など、いわゆる技術改新、原料革命による1次産品消費の相対的低下といった需要構造の変化が作用していることは見のがせない。このところ欧州諸国の第1次商品の引合いが、安値買いの在庫補充に終止しており、米国の景気上昇が第1次商品の実需の増大となって直ちに現われてこないのも、上記のごとき戦略上の要因を含めての需要構造の変化に起因するところが少なくなかう。

#### 市況安定化への具体的な動き

市況低迷の主要因がいずれにあるにせよ、東南アジア諸国にとって現実の輸出稼得の減少は、深刻な影響を与えつつある。このため、東南アジア諸国には外国援助もさることながら輸出の増大がよりいっそう重要であるとの訴えが近來とみに高まりつつある。先般エカフェ第18回総会において、インド、セイロン、フィリピン、インドネシア、マラヤなどから「エカフェ地域の経済成長には主要輸出品の第1次商品価格の安定と輸出量の増大が最大重要事で、先進工業国の協力により国

際的安定策が講ぜらるべきである」との意向が強調され、同総会において、①1次産品貿易に関する国際貿易会議の開催、②コブラ貿易の拡大に関する具体策の検討を要請する決議が行なわれたのも、かかる事情からにはほかならない。さらに、これと関連してコブラについてはフィリピンが、ジュートについてはパキスタンがそれぞれ域内主産国に呼びかけ、価格安定と輸出量増大のための施策を検討しはじめている。このように東南アジアの第1次商品主産国が協力し、主体的に本問題

の解決に乗り出そうとしていることは、これまでと全く本問題が原料消費国への要望のみにとどまっていたことからして高く評価さるべきであろう。しかし前述のように、市況低迷の背景には先進国における原料需要構造の変化が大きな圧迫になっていることを考えれば第1次商品の安定化および輸出量の増大は容易ではなく、それだけにこの問題は先進国の協力態度いかに大きくかかっているといえよう。

東南アジア主要第1次商品価格の動き

			1962年 3月末 (A)	1960年 12月末 (B)	過去2 年間の 最 高 (C)	過去2 年間の 最 低 (D)	$\frac{A-B}{B}$	$\frac{A-C}{C}$	$\frac{A-D}{D}$
	市 場	単 位							
錫	シンガポール	マラヤ・ドル/ピクル	480	389	489	386	+23.4%	- 1.9%	+24.4%
	シンガポール RSS 1号	マラヤ・セント/封度	80¼	86½	125½	74¼	- 7.4	-36.1	+ 7.4
ゴム	ロンドン	ドル/屯	170	167	215	162	+ 1.8	-21.0	+ 4.9
コブラ	カラチ	ルピー/モンド	75	90	90.2	74.5	-16.7	-16.9	+ 0.7
綿花(パキスタン)	カルカッタ	ク /俵	225	325	385	210	-30.8	-41.6	+ 7.1
ジュート	ニューヨーク	セント/封度	2.80	3.25	3.40	2.21	-13.9	-17.7	+26.7
砂糖	ロンドン	シリング/封度	2-6	3-7	3-7	2-6	-30.2	-30.2	± 0
茶(下級)	バンコック	ポンド/ 屯	(1月末) 53-10	48-10	57-10	48-0	+10.3	- 7.0	+11.5
米(タイ)	白米	シリング/ 屯							
(国際原料品価格指数)									
フィナンシャル・タイムズ 1952年7月1日=100			78.86	77.26	83.94	76.60	+ 2.1	- 6.1	+ 2.9
ロイター 1931年9月18日=100			416.5	406.1	429.7	406.1	+ 2.6	- 3.1	+ 2.6

エカフェ第18回総会の模様

—O A E C を 中 心 に—

エカフェ(国連アジア極東経済委員会)第18回総会は、3月6日から19日まで東京で開催された。本年の総会は、EECの発展、これに対する英国加盟の動き、L A F T A(ラテン・アメリカ自由貿易連合)の発足など世界の経済統合の動向の中で、エカフェ事務局が提唱しているアジア経済協

力機構(O A E C)の構想がなんらかの具体的進展をみせるのではないかという点で各方面から注目されていた。しかし、エカフェ諸国の間には、地域協力の必要性は認めつつも、共同市場のような内容のO A E Cを設立することについては、日本をはじめ慎重論が支配的で今後の研究課題とされるにとどまった。なお、このほかEECの発展や英国の加盟の動きに対してエカフェ諸国から不利な影響を懸念する声が強くと表明され、また1次産品の安定が強調された。